

胃の拡大内視鏡診断

八木 一芳, 味岡 洋一 著

病理所見との対比検討で論理的に解説

福島県立医科大学会津医療センター準備室・消化器内科

山 部 茜 子

私が胃拡大内視鏡を学び始めたころ、異常粘膜をみた際に“何となく変だ”というのはわかって、どうして変なのか、なぜそういった像になるのかということは全くわからなかった。理詰めではなく、こういうものなのだと納得していくしかないのかと諦めかけていた矢先に出合ったのが本書である。拡大内視鏡に関しての参考書はいくつかあるが、拡大内視鏡所見をここまで詳しく論理的に説明している本はないと思う。

本書の特徴は、何をおいても各症例の拡大内視鏡所見と病理所見の一対一の対比検討であろう。局所的、表面的観察にとどまりがちな内視鏡所見を、病理所見と細かく対比・検討し、著者らの正確で豊富な知識に基づいた説明が加えられている。平面である内視鏡所見と、病理所見を対比することで3次元の構造をイメージしながら勉強することができ、新たな世界が広がってくる。ま

さに目からうろこである。本書の流れとしては、まずは基本となる正常粘膜の拡大内視鏡像の説明から始まり、次に慢性胃炎、分化型早期胃癌、未分化型早期胃癌と順序立っており、最終的には拡大内視鏡観察時の胃癌診断のフローチャートが示されている。必要な場所には親切な解説やシェーマ、細かい用語解説が添えられ、これから拡大内視鏡を始める人、あるいは初心者にとっても極めてわかりやすい内容となっている。写真や実際の症例を多数掲載することによって、系統立った理解に加えて視覚的な理解も十分得られる。また、拡大内視鏡の他にも、胃内視鏡診断学において重要な酢酸併用法の解説もされており、酢酸散布で観察される立体的な像を加えることでさらに理解を深めることができる。

本書のもう一つの特徴は、「ちょっと一息」や「拡大豆知識」などのコラムが記載されていることだろう。胃

拡大内視鏡診断学の先駆けとなられてきた著者の先生方ならではの秘話が記載されており、非常に興味を引く。また、「拡大豆知識」においては、本書を読み進めていく上でちょっとした疑問にまで言及されており、まさにかゆい所に手が届く内容となっている。著者の先生方の熱い思いが伝わってくる1冊である。

本書は自然な流れで胃拡大内視鏡の世界へ導いてくれるものであり、読み終えるころには基本的な考え方が身につくようになっている。今後、胃拡大内視鏡診断はさらに大きく発展することは間違いなく、本書は内視鏡診断学に携わる者にとって、拡大内視鏡所見を理解するのに欠かせない書であると思う。多くの方々がこの本を手にし、ここから学ばれることを心より願う。

●B5 頁148 2010年 定価10,500円
(本体10,000円+税5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)